Wanderers さまようモノたち

Toshiya Yui
Solo Exhibition

私は、生命を感じさせる、動きのある作品を作り続けてきました。
それらは「Wanderer ―さまようモノ―」と呼べるような存在です。
分子レベルや時間軸など、想像を膨らませて考えると、すべてのものが世界を循環し、旅をしているはず。モノも、私も、あなたも。
長い目で見れば、万物は動いており、すべてのものが「Wanderer」なのかもしれません。

生き物のようなWanderers

1. floatio

Toshiya Yui + Tomohiro Yokota + Tomoko Hashida

万有引力の象徴である「りんご」をそっと装置の上に置くと、浮遊し、まるで自らの力で生きているかのように動き出す。ドローン技術のように、私たちの日常空間にも空中に浮かぶ物体が溶け込み、新たな生活様式が生まれていくかもしれない。浮遊するモノに秘められた生命感が、モノとの関わり方や生活のあり方を再考させる。

過去展示の映像にて紹介

2. floating wanderer

りんごを置くと、浮かび上がり、自由に旅に出ていく。
今日も、日本の6割近くの人が"りんご"のモチーフを運んでいる。今後は、そのりんごにAIが搭載されるらしい。きっといつか、りんごは自分たちで動き回るだろう。

3. New Ton Ton Ton...

木の周りをジャンプして、浮いたり落ちたり。いろんな動きを見ていると、新たな何かを発見できる気がしてくる。ニュートンが万有引力を発見したように。

4. Astral Body

plus one (Hiroki Naganuma, Masafumi Harada, Takayuki Fukusawa, Kazuyoshi Fukutani, Osao Hori, Keiko Yamamoto, Toshiya Yui)

真っ黒な砂の海を"影"が彷徨っていく。身体がなくても、気配だけが動き回る。生命の本質は「身体」と「気配」どちらなのだろうか？
甲殻類の骸と、脱皮したような気配が同居する本作は、人工生命体の実現にあと1つ足りないとされる「ブルックスのジュース」は何かを問う実験場でもある。

過去展示の映像とともに縮小版実物を展示
※時間によって、影が現れない場合があります。

想像し旅に出るWanderers

5. 息の旅先

ある本に、"約2069年前のローマの支配者シーザーの最後の吐息の1分子が、私たちの肺に入っている可能性が極めて高い"といった内容が書かれていた。この世界を巡り巡って、さまざまな空気の分子がここまでたどりついている。きっと、アルキメデスが「エウレカ！」と叫んだ空気も、恐竜が孵化して初めて吸った空気も、太古の昔のシアノバクテリアが生んだ空気も――今、あなたの肺には世界を巡った息が満ちている。

この作品に息を吹きかけると、その息が巡るかもしれない旅の候補先を示す。
あなたの息は、これからどこに向かうのだろう？

6. Hidden Credits

モノを置き、撮影すると、そのモノに関わってきたかもしれない人々の姿が浮かび上がってくる。モノたちは多くの人の手を渡って、つくられ、運ばれ、ここにある。見えないつながりをたどり、あったかもしれないモノが秘めてきた「旅路」を私たちは追体験する。

7. Wandering Scenery : Cart

日常の中で見つけた、Wandererのような風景から着想を得た作品。駐車場の奥深くに、ひっそりと取り残されたカートがあった。今や購買の象徴であるカート。ボタンひとつで完結する購買の裏側で、カートたちは忙しく動き回っているのかもしれない。

8. Wandering Scenery : Leaves

日常の中で見つけた、Wandererのような風景から着想を得た作品。白線に落ち葉の跡が残されていた。季節の名残が縁取る小さな旅路を思い起こす。毎年、多くの落ち葉があちこちを旅し、気づけばどこかへ消えてしまっている。

9. Escalator Museum

Takayuki Fukusawa + Tomoya Morohoshi + Toshiya Yui

エスカレーターは、ただ人を運ぶためのものではない。そばの景色と身体の移動が同期するとき、アニメーションの再生装置となる。
六本木アートナイトでは、エスカレーターの坂道のそばに、転がり落ちるりんごの旅を見せるインスタレーションを置いた。エスカレーターに乗ると、動く風景と観る者の知覚が補完し合い、転がり落ちるりんごのアニメーションが展開される。
さらに、エスカレーター上で歩くことが問題視される現代において、美術館の形式を街中に取り入れることで、人々が立ち止まるのかを問う社会実験としても実施した。

過去展示の映像にて紹介

気づきをもたらすWanderers

10. Curating Frame

自律的に動く額縁は、自ら興味を引く風景を探し、切り取っていく。フレームに収まることで、ただの日常が作品へと変貌する。さらに、風景をもとにAIが勝手にタイトルをつけていく。AIは、あえて正解とは少しズレたタイトルを提示することで、鑑賞者に新たな気づきを促す。見ること、選ぶこと、名づけること。本来、人間の視点でしかなかった行為を、美術用品たちが行い、機械の視点から人々に新たな視点を提供する。

過去展示の映像にて紹介

11. Inclusive Interphone

一軒家で展示をした作品。インターフォンのチャイムが鳴ると、そこに映し出されるのは、見知らぬ誰か。AIが生成した、性別や年齢、文化、言語が異なるさまざまな訪問者たちである。あなたはこの訪問者を受け入れるだろうか？受け入れる準備は整っているだろうか？会話をする、解錠するというインターフォンを押す小さな選択が、私たちが他者をどう認識し、どこに境界を引いているのかを浮かび上がらせる。

過去展示の映像にて紹介

Toshiya Yui

メディアアーティスト。
1993年長野県生まれ。早稲田大学大学院基幹理工学研究科修了。
自分が見たい景色をつくるために、生物らしさを加えた機械や、自然現象を用いた作品を制作している。
Roppongi Art Night 2019 にて「Escalator Museum」、パナソニック クリエイティブミュージアム AkeruEにて「floatio」展示など。

協力
DMデザイン：Rina Kimura
設計協力：Takayuki Fukusawa

NEORT++ 文化庁メディア芸術クリエイター育成支援事業
Project to Support Emerging Media Arts Creators

この紙もWanderer



次はどこに行くのだろう